

佛説聖佛母小字般若波羅蜜多經

西天中印度惹爛駄國密林寺三藏

賜紫沙門臣 天息災 詔ヲ奉ッテ譯ス

是ノ如ク、我、聞ク。

このように、私にも、聞こえねばならぬ。

一時、世尊ハ、王舎城、鷲峯山中ニ、在マシキ。大比丘衆千二百五十人ト、俱ナリキ。并ビニ、諸々、百千俱胝那由多人、菩薩、復タ、百千俱胝那由多人、梵天・帝釋・ノ、護世ノ、諸々ノ、大衆等、有ッテ、恭敬シ、圍遶セリ。爾ノ時、世尊、吉祥寶藏獅子座ノ上ニ、結跏趺坐シタマエリ。

もったいなくも、ほとけが、争覇の城都、ラージャグリフ府中、すなわち、きみがみちみやこに、自から、お出ましになられるということがあった。はたして、グリドラクート山上、すなわち、はげたかだまりのおかに於てでは、しかも、パルヴァット、すなわち、「金漢峽」、すなわち、ごがねざわ 溪中に於て、遊ばれていたが、そのような時でさえ、絶大の、修道会のことは、決して、お忘れになっていたのではない。

しかも、また、千二百五十科の、庶般には、かけまくもかしこき、すなわち、菩薩とも称うべき、諸錯密体どもが、集約されてある、百千箇そのことによって、万端に、もれなく、わたらせたまうのではあったが、もはや、寵世の、諸精神ら、あまつかみがみ、千元にも、すでに、これ、幹旋をば、お任せあるのであって、いまや、ご禅適ならせつつ、巖獅霊の坐視、すなわち、徳禄位によって、いよいよ、悠優自適あそばすのでもあった。

是クノ時ニ、聖、觀自在菩薩、摩訶薩、即チ、座ヨリ起チ、偏袒右肩シテ、右膝ヲ、地ニ著ケ、世尊ヲ、瞻仰シテ、頭目、暫クモ、捨テズ。合掌恭敬シ、歡喜踊躍シテ、頭面禮足シ、而カモ、佛ニ、言ウシテ曰サク。

さて、かたや、菩薩様、すなわち、大要訣におかれましても、また、うるう、すなわち、仁潤姐なる、かんのん、すなわち、啓祐仁として、ご感興ならせるや、あくまで、そ

れ、啓居の方からではあるが、なおも、また、絶対項たる、生理という非權益を通し、ひとまず、ご有効これならせられ、あえて、怜悯なる御方ご一代の代わりとて、その、膝下という髓裡そのことをして、しばらく、地平原そのものに於て、待機せしめおかれたるのちに、やがて、およそ、みほとけが、すべからく、よってあずかりおわすべきならんものと、そのようなことがらそのことによって、すなわち、空掌ご自身をこそ通して、おもむろに、ご傾向なりませるや、いよいよ、口給人ご一身として、ここに、ご存立あそばされ、しかも、ほとけを通し奉って、かくいうところにと、ご弁証ならせられたり。

世尊。唯ダ、願クバ、世尊、我ガ為ニ、是クノ、小字般若波羅蜜多ノ、經ヲ、説キタマエ。諸々ノ、衆生ヲシテ、是クノ、法ヲ、聞クコトヲ得テ、大福德ヲ、獲シメン。一切ノ、業障、決定シテ、消除シ、當來、速カニ、無上ノ、菩提ヲ、獲ン。若シ、衆生、有ツテ、至誠心ヲ、發シ、此ノ、眞言ヲ、受持シ、讀誦セバ、所求ノ願ニ、隨ツテ、決定シテ、諸魔ノ難ノ無キヲ、成就セン。

ひるめよ。けだし、はんにゃはらみつ、すなわち、「ゆかしことのついでのはからいということ」は、いよ、向趣せしめるべきでもありましょう。しかも、なお、高度に微密なるべしとあろう者らが不易たるべくはおろう、甚大の、佳適性そのことを通してでもつかまつらうばかりとは、それ、なければありますまい。

すなわち、およそ、臨上すること、ただ、それ自体で、「なにもかも」という英霊たちが、また、諸々の、「誰もかれも」という命運による掩蓋をして、衰退せしめるであろう、もとの、場が、少なくとも、諸々の、菩提、すなわち、理性という、並進涯として、なおも、存続するかもしれません。しかして、それは、およそ、諸英霊らが、祈りの証かしに於て、合的になっているばかりにいませるならん、その、御方がたのことにもあろうはずではあります。はたして、そのようなことそのことのみなりけりともあったはずの、これ、非機略そのことによって、ようやく、諸々の、祈りのみたま、すなわち、ごしんごん、すなわち、マントラ霊、すなわち、内命霊たち一代らが、みごと、え証かせはできるのでもあります。

爾ノ時、世尊、聖、觀自在菩薩、摩訶薩ニ、告ゲタマワク。

さて、あなた、ほとけにおかせられては、かんげおん、すなわち、仁愛をば背にしたる  
励導主としていませる、菩薩、すなわち、大要訣たる、絶大の、悲壯者ご一代の為とてあ  
ずかりたまうべく、あえて、御恩慶なる権能を通し、宣託たまわすのであった。

善哉。善ク、是クノ言ヲ、説ケリ。善哉。善哉。善男子。汝、能ク、是クノ、  
至心ノ、如ク、諸々ノ、衆生ノ為ニ、安樂・長壽・ヲ、得セシメヨ。善男子。  
汝、應サニ、諦カニ、聽ケ。至心ニ、我ガ、説ク、是クノ、小字般若波羅蜜多  
ノ、經ヲ、聽ケヨカシ。若シ、諸々ノ、衆生、是クノ、法ヲ、説クヲ、聞カバ、  
大福德ヲ、獲ン。一切ノ、業障、皆ナ、悉ク、消除シ、決定シテ、速カニ、無  
上ノ、正等菩提ヲ、證ス。若シ、衆生、有ツテ、發心シテ、此ノ、眞言ヲ、受  
持セバ、無諸魔ノ、事、皆ナ、成就スルコトヲ、得ン。

あなかしこ。あなうれし。御宗家、ひみこよ。およそ、あなたほどの御方なれば、  
すべからく、諸々の、「なにもかも」という英霊たち、すなわち、利準ご一代の為に  
とも、それ、あずかられませ。いずれ、存託なっているばかりの、やすらい、すなわ  
ち、帰適そのことの為とては、あずかりおかれましようが、なおも、また、連々夜に  
こそ、ご内応なりたもうておわすでもあろうこととは存じます。

けだし、そのようなことそのことによってあずかりありませるのも、あなたご自身  
におかれますからには、御宗子、ひみこよ、もはや、ご臨上ならせられませ。つとに、  
これ、御吉慶そのこととて、あずかりわたられましようばかりではあろうが、なおし、  
また、高致にも、ご心思ならせられませ。

自叙もうし上げましようぞ。私が、あなたの為に。まさしく、ほんにゃはらみつ、  
すなわち、「ゆかしことのほかのはかどりということ」を通してこそ。また、まさに、  
高次たる諸小許が略言なるべくはあろうばかりの、博大に、好佳的たる、廷を、通し  
てこそ。

はたして、およそ、親臨すること、ただ、それ自体で、「誰もかれも」という英霊  
たちが、また、諸々の、「なにもかも」という運氣による掩填をして、減衰せしめる  
であろう、もとの、砌が、少なくとも、諸々の、菩提、すなわち、知性なる、並歴  
涯として、なおし、存立するやはしれませぬ。しかして、それは、およそ、諸英魂ら  
が、折りの証かしに於て、投合されてあるばかりとていいますならん、その、御方がた

のことにあろうはずではあります。はたして、彼ご自身のたるべきともあろうはずの、それ、無機計そのことによって、いよいよ、諸々の、祈りのみたま、すなわち、ごしんごん、すなわち、マントラ魂、すなわち、内野魂たち一代らが、みごと、え証かせこそあるわけであります。

是クノ時ニ、聖、觀自在菩薩、摩訶薩、復タ、佛ニ、言ウシテ、曰サク。

さて、かたや、かんげおん、すなわち、仁篤なるべしとあろうものごとどもを背にしたる勵導主にして、菩薩、すなわち、大英概も、また、すでに、みほとけを通して、これこのこととて、ご弁済あそばしたことであった。

善逝。今ゾ、説キタマエ。諸々ノ、衆生ヲシテ、安樂を、得セシメンガ為ニナリ。

もはや、そのようなことそのことによってあずかられましようわけでありますから、たかぎよ、列叙たまわされませ。何とぞ、諸々の、「誰もかれも」という英霊たちの事にあずかるべし、とておわさん、そのままにこそ。すでに、平準ご一代の為とて、これ、あずかりあられましようが、いずれ、託嘱せられてあります者こそその為とて、よしなに、また、それ、やすらぎそのことの為にと、つとに、あずかりあそばせこそはありましようけれども。

爾ノ時、世尊、而カモ、一時ニ於テ、三摩地ニ、入リタマウ。名ヅクルニ、解脱一切衆生トナリ。定ヨリ起チタマウコト已ニシテ、眉間ノ毫相、百千俱胝那由多ノ、光明ヲ、放テリ。此ノ、大光明、普ネク、一切、諸々ノ、佛ノ刹土ヲ、照ラシ、有ル所ノ、無量ノ、衆生ハ、光ノ照曜スルヲ、蒙リテ、皆ナ、決定シテ、速カニ、阿耨多羅三藐三菩提ヲ、證スルコトヲ、得タリ。有ル所ノ、地獄ノ、一切ノ、衆生モ、皆ナ、安樂ヲ、獲タリ。諸々ノ、佛ノ刹土ハ、六種ニ、震動セリ。諸々ノ、佛ノ、上ニ於テ、又タ、雨レリ。上妙ノ、栴檀・沈水・ノ、細沫之香ヲ、以ッテ、供養ニ、用ウナリ。

さて、あなた、ほとけにおかせられては、すでに、そのような、絶高潮のこととであった、場に於ても、なお、また、うさぎがみ、すなわち、「なにもかもを苦困となすならん放縦能」と、名の立つ、悟得體そのものにと、ご感嘆できたまわれますのであった。

はたして、およそ、その、悟性に対し、ご交感なつてあそばせるばかりにわたらせよう御方、すなわち、みほとけの、事に、あずかるべきとてあろうままにこそ、もはや、纖毫毛に被われたる裂腔、すなわち、枢株の方から、また、諸々の、多元なる、和光束の百千科も、しきりに、批准、これ、なりもうすのであった。

すでに、そのような、諸光景としての、ものごとどもによってあずかるべく、これ、おらねばならなかつたわけであるが、なおし、それ、諸々の、誰もかれもが、ブツダ、すなわち、「覚英仁」とてあるべき、本田どもそのこと、すなわち、「ひだかみのくに」、すなわち、諸々の、利深たりしおおみことがらどもは、はたして、存続、これ、あるのであった。

また、およそ、諸々の、英魂らのことにあらん、御方がたも、そのような、明暁境としておつた、廷によつては、すべからく、抵触なつておわすばかりにともあらせられるのであつて、もはや、そのような、なにもかものことであつた、者たちとして、諸々の、固有なつていませる御方がたも、こもごも、ご存立あそばしたことであつた。すなわち、未央なるべしとはおわさりよう御方の為とて・いよや、なお、サンミヤクサンボーディ、すなわち、正一履道場、すなわち、ひのもとのかにそのものに於てでも・あげて、これ、あずかるべく、あらせられますところではあつた。

また、諸々の、囚獄人たち、すなわち、諸々の、英魂たちにあつても、もはや、やすらいそのことに於て、いずれ、存続、これ、ありもうすのであつた。

また、諸々の、「誰もかれも」たちのこととはあつたばかりにもある、諸々の、あきつしまね、すなわち、「仏国土」どもそのことにあつては、もはや、六箇の、転機に対し、逸予なりもうしさえしたわけであるが、しかも、なお、香水の雨そのことが、すめらぎ、すなわち、如来という足取りをば、その、根回りとしておる、おおみものごとどもを通して、しきりに、覆い互らんとするのではあつた。

爾ノ時、世尊、此ノ、般若波羅蜜多ノ、經ヲ、説キタマウ。

さて、かたや、ほとけにおかせられても、ようやく、そのような、最高潮のことであつ

た、砌に於て、また、おもむろに、はんにやはらみた、すなわち、「ゆかしことのついでのはからいということ」にと、これ、叙陳はたされますのであった。

是クノ時ニ、有ル所ノ、一切ノ、菩薩、摩訶薩、各々、平等之心ヲ、發起シテ、慈愍心ヲ、發起シ、憶念利他心ヲ、發起シテ、遠離一切罪障心ヲ、發起シ、般若波羅蜜多心ヲ、發起セリ。

当然、やがて、菩薩、すなわち、大要訣によつても、それ、あずかり知れることとはなるのであって、すでに、等価なりきことがらども志識これなつてはいませる御方によつても、なおし、観念せられあらねばならぬものごととして、もはや、お立ちにならせるのではあったが、いよいよ、諸々の、なにもかもが英魂なりとてあることがらどもに於てでも、やはり、にぎみたま、すなわち、友愛をば心神としてあそばせん御方によつては、いずれ、観想されねばならぬものごとをこそ通して、お起ちあらんばかりにもあった。

また、つとに、知恩人によつても、それ、観念せられねばならぬことがらとて、お立ちになられるのではあった。しかも、また、感恩人によつてでも、なおし、これ、あずかられんばかりにはあらねばならぬが、いずれ、だれもかれもという俗趣の中絶なつていませる者が意識せられてあるものごとによつてでこそ・すなわち、観想されねばならぬことがらを通してでこそ・やがて、お起ちあらんばかりとてなければならぬ。

是クノ時ニ、世尊、聖、觀自在菩薩、摩訶薩ニ、告ゲタマワク。

汝等。諦カニ、聴ケヨカシ。我、今、汝ガ為ニ、是クノ、聖佛母、小字般若波羅蜜多人、眞言ヲ、説イテ、曰ク。

けだし、このようなことそのこととしても、それ、あずかるべくおらねばならなかつたばかりのではあるが、これ、はんにやはらみた、すなわち、「ゆかしことのほかのはかどりということ」のこととてなければならなかつたばかりの、やまとうた、すなわち、本心性そのことが、ようやく、領承せられあらねばならぬことがらとして、ここに、立つことになるわけである。すなわち、

曩莫舍吉也母曩曳怛他誡多野羅喝帝三麼藥訖三沒駄野怛備也他母寧母寧摩賀  
母曩曳娑縛賀

「けだし、なりさだめそのことは、諸恵沢の三位性の為とてもあらねばならなかったが、もはや、さだめゆきそのことも、また、シャークヤムニ、すなわち、機巧能がしじまとています御方、すなわち、廉能仙のことにもあられよう、すめらみこと、すなわち、如来、すなわち、救世主にして、やおよろず、すなわち、慰恩者たる、サンミヤクサンブツダ、すなわち、衷立者、すなわち、あめのみなかぬしのおん為にと、それ、なければなるまい。当然、

『よしや！しじまよ。しじまよ。おおしじまのおんためにぞ。いやさか！』  
ではあることにもなる。」

佛、聖、觀自在菩薩、摩訶薩二、告ゲタマワク。

此ノ、聖佛母、小字般若波羅蜜多ノ、眞言ハ、一切ノ、諸佛、是二由リテ、阿耨多羅三藐三菩提ヲ、得タマウ。我、亦タ、是クノ、小字般若波羅蜜多ノ、眞言ニ、由ルガ故ニ、無上、正等菩提ヲ成スコトヲ、得タリ。往昔ニ、佛有リ、名ヲ、釋迦牟尼如来トナス。彼ノ、佛ノ、所ニ於テ、是クノ、法ヲ、説キタマウヲ、聞ケリ。彼ノ、佛ノ、説キタマウ、言トハ、是クノ如シ。三世、一切ノ、諸佛ハ、斯クノ、法ニ、由ルガ故ニ、方サニ、成佛スルヲ、得タマウト。

しかして、このような、ほんにやほらみつ、すなわち、「ゆかしことのついでのはからいということ」のこととてあった、場、すなわち、かむやまといわれびこ、すなわち、存介人ご自身の方からは、はたして、私によっても、これ、やんごとなかるべき、すなわち、未央なるべき、サンミヤクサンボーディ、すなわち、公正履道場、すなわち、ひのもとのくにが、すでに、継続なっているばかりにはあった。しからば、諸々の、サルヴァブツダ、すなわち、「なにもかも」という覚在能、すなわち、おおみかみがたがではあるが、かくなる上は、「ご準行なってもおわせるばかりなり。」とは云えよう。

はたして、私によっても、なお、つかまつるべく、おらねばならぬばかりではあつても、もはや、このような、まさしく、廷そのものとしてはおろうはずの、ほんにや

はらみつ、すなわち、「ゆかしことのほかのはかどりということ」が、すでに、それ親臨せられてあるところとてあつたばかりでなければならぬ。けだし、これ、絶大の機動性という、おんしじま、すなわち、おおかむづみご自身のこととはあらわれました、すべらき、すなわち、如来、すなわち、救世主ご一代の、御事に、あずかりあるべくして・しかも、なお、半視座自身こそその方から、わずかに、あずかり知れるばかりなりとて・はあるのでもなければありませぬ。

佛、復タ、聖、觀自在菩薩、摩訶薩ニ、告ゲテ、言マワク。

我、今、汝ガ為ニ、其ノ、記別ヲ、授ケン。汝ハ、人間ノ、未來世中ニ於テ、佛道ヲ、成スコトヲ、得ン。普放光明吉祥寶峯王ト號ス、如來・應供・正等覺・タラン。汝、是クノ如クノ、妙法ヲ、聽聞スルコトヲ、得タリ。應サニ、當サニ、受持シ、讀誦スベシ。若シハ、自ラ、書寫シ、若シハ、人ニ教テ、書キテ、思惟シ、解了セヨ。復タ、能ク、他ノ、一切衆生ノ為ニ、其ノ義ヲ、廣説セヨ。彼ヲシテ、是クノ、經ヲ、書寫シ、己ガ、舍宅ニ於テ、受持シ、讀誦セシメヨ。未來世ニ於テ、速カニ、無上ノ、正等菩提ヲ、成サン。是クノ時、一切ノ、如來ハ、同ジク、汝等を、證シタマワン。

そのような御方によつても、かたじけのうせんばかりには、おらねばならぬわけですから、あなた様ご一代が、もはや、誰もかれもが、その、菩提、すなわち、覺然体なりとてあらんばかりの、諸英魂、すなわち、全徳人たちの、事に、あずかるべく、これ、おわすのでなければなりません。ひとまず、機先の上からは、ただし、覺現せられおえておることにて、ようやく、あずからんとおわすでもあろうが、なおし、また、すでに、所詮なりたもうては、それ、あらせるのでもある。むしろ、ご存立なりたまわしよう場合には、すべからく、あなた様ご自身こそが、いよいよ、あそばされませ。人道よ。

しかも、なお、未だ、曾來ならずにいる者としてはおらねばならぬばかりにもいませる、方角ご一代に於ては、いずれ、至近という光度ご自身が、しきりに、再来なつてあそばせるばかりになければならぬのであつて、やがて、シュリーケーターラージャ、すなわち、「福祿位が堆壘なりとてあるべき王道」とも、名を、遂げたまうであろう、



すべらみこと、すなわち、如来、すなわち、救世主こそ、もはや、みそなわせつつはあそばさん、阿羅漢、すなわち、サンミヤクサンブツダ、すなわち、表立者、すなわち、あめのみなかぬしのこととてもおわたはすでなければありますまい。

しからは、被感涯の歴行が共同なつてはいるばかりともおさせるが、しかも、また、たかぎ、すなわち、高次に完了せられてあられる御方としてはあそばすはずでもあり、やはり、これ、世間が直感するにたるべし、ともおさせるであろうが、なおも、それ、やんごとなかるべしと、すなわち、未央たるべしと、はおわせることでもあろう。

すなわち、賓客らにより調進せられざるをえぬ馭僕こそ、むしろ、統監者のことにもあろうはずではありますまいか。もつとも、これ、なおし、諸々の、あまつかみすなわち、神性たち自身の、事に、しばらく、あずかるべきなり、とてもあそばれるばかりではありましようけれども。

しかして、やがて、諸々の、人魂たちの、事に、あずからんところをおわすことではありましようけれども、もはや、いよいよ、ブツダ、すなわち、才覚者、すなわち、「あきつかみ」としてはあらせねばならぬはずともあそばすのが、けだし、みほとけにこそなければなりませんまい。

すでに、このようなことそのことのおわたはすではあつても、もはや、諸々の、およそ、このようなこととしてあらせるならん御方がたご一代が、いずれ、名のある者を通して、ひとまず、臨上ありたまうであろうことにはなっているのであつて、はたして、それ、やがて、自疏せしめたまうかもしれぬし、なおも、弁証せしめおかれるであろうし、また、いよいよ、銘感せしめあそばすやもしれませぬ。

また、いずれ、諸々の、客分どもそのことの為とても、あずかるべくあろうばかりのではあるけれども、すなわち、凡例自身によって、いよ、再現せしめたまうことであろうし、また、なおし、塑型のままなる者らの感銘なつてもいるものごとを通して、それ、あずかるべく、おわさんばかりではあつても、いよいよ、ご有効、これ、ありおかせてのち、やがて、枢府一代に於て、それ、自負せしめたまうかもしれぬし、しかも、なお、供養せしめ、これ、おさせることでありましよう。

また、諸々の、そのような、なにもかもどものこととてあられた、御方がたとして、しばらく、それ、微瑣たるべきとおろう、方便、すなわち、靈能によって・やがては、これ、少許による臨上そのことによって・ここに、ようやく、諸々の、すめらぎ、すなわち、如来、すなわち、救世主がたが、いよいよ、ご存続あそばすやはしれませぬ。

我、今、汝ガ為ニ、復タ、般若波羅蜜多ノ、陀羅尼ヲ、説イテ、曰ク。

怛爾也他唵惹野惹野鉢訥麼避遏縛銘薩囉薩哩呢尾哩尾哩尾囉尾哩企哩企哩爾  
縛多弩播羅尼沒度哆囉呢布囉呢布囉野婆誑縛帝薩栗縛商麼麼布囉野薩栗縛薩怛  
縛難左薩栗縛縛栗麼縛囉拏尼尾戍馱野尾戍馱野沒馱地瑟宅摩曩娑縛賀

当然、『よしや!のびすぐれしめよ。かちすぐれしめよ。ゆにわのはすばなと  
いううつしざまよ。いまだはきもようさぬふちよ。はきいださざるふちよ。なが  
しくだれよ。しきながれよ。ことよりめよ。うけおいめよ。もはや、あまつかみ  
すなわち、こころねならざるをえぬということのことにこそあれかし。ちのみち  
よ。わたつせのもちいまわりているわざものよ。あだごころがあきつみいくさた  
りけらしつぐみからよ。みたしめよ。たらしめよ。みほとべ、すなわち、うまし  
くによ。だれもかれもとしても、これ、おらねばならなかつたはずではあるのも、  
また、ためつものぎわそのものになければならぬ。いよいよ、わたくしのならま  
ほしけれともかたじけのうせんばかりにあるであろうはずではあるけれどもで  
ある。いずれ、もろもろの、なにもかもというみことたちのたらまほしとはまかり  
おろうきわにもおらんはずのではあるけれども、また、もろもろの、だれもかれ  
もらというなせゆきすじによるかけふさぎ、すなわち、おおだかかりどもその  
ことをして、なおし、きよまらしめよ。とりすべりておるみざりがおぼえはやさ  
れてあるわざものよ。いやさか!』

ではあることにもなります。

佛、聖、觀自在菩薩、摩訶薩二、告ゲタマワク。

此ノ、勝妙ノ、法、般若波羅蜜多陀羅尼ハ、是レ、能ク、一切ヲ、出生スル  
トコロノ、諸佛菩薩之母ナリ。若シ、衆生有ツテ、暫クモ、是クノ、法ヲ、聞  
カバ、作ス所ノ、罪障、悉ク、皆ナ、消滅セン。此ノ、法ハ、一切ノ、諸々ノ、  
佛、及ビ、衆タノ、菩薩、百ノ、俱胝劫ヲ、經テサエモ、其ノ、功德ノ、能ク、  
盡キルヲ、得ルコトアタワザルヲ、説キタマウ。若シ、能ク、此ノ、陀羅尼ヲ、  
受持シ、讀誦セバ、便ワチ、同ジク、一切ノ、曼拏羅ノ、中ニ、入り、灌頂ヲ、  
受クルコトヲ、得ン。又タ、受持スル、一切ノ、眞言ノ、如クニ、皆ナ、成就  
スルヲ、獲ン。

なおも、このような、けだし、そのような場のこととてある、廷として、あずかりあるべく、おらねばならなかったのも、御宗家、ひみこよ、すなわち、ばらまるたはんにははらみた、すなわち、「おくゆかしことのついでのはからいということ」になければなりません。

つとに、諸々の、サルヴァブツダ、すなわち、なにもかもどもという覚存能、すなわち、おおみかみがたの、事に、あずかるべき、とてあつた場合には、なおし、これ、出産母胎そのもののものであつたのではあるが、しかも、なお、菩薩とも称うべき、すなわち、かけまくもかしこき、母性涯そのものとしても、それ、すでに、あずからんとおろうばかりにはいるのであつて、もはや、菩提、すなわち、自覚体をば、託信者となすべきともあらんばかりの、すなわち、俗気が等閑もうすにたるままたるべき、砌のことである。と云えましょう。

はたして、諸々の、サルヴァブツダ、すなわち、誰もかれもが覚然なつておわせる御方、すなわち、おおみかみがたによって、なおも、あずかられるべく、おろうわけではあつても、いかんせん、このような御方ご一代の、事に、あずかるべきとてあらん場合には、そもそも、訓上涯そのものが、もはや、弁理なすに、堪えるわけでもないであります。乃至、いずれ、諸代数をば錯密体とする百元そのことどもによって、あずかるべく、これ、おらざるをえぬばかりでさえはあつてもであります。

しかるに、このような、場そのものによつてこそ・すなわち、自己自体の謳歌なりもうしているわざごとそのことにこそよつて・ようやく、なにもかもが暈環層なりとてあるべき霊域の滋潤これなつてはいませる御方がたも、また、ひとまず、ご存立なりたまうのであつて、けだし、「誰もかれも」らのことにはあられようはずでもあるところではあるけれども、すなわち、諸々の、祈りむき、すなわち、ごしんごん、すなわち、マントラ神、すなわち、命意がたご自身が、はたして、端的たるべくはおらん、廷どもとしてこそ、あえて、ここに、ご存続ありませるわけであります。

是クノ時、聖、觀自在菩薩、而カモ、佛ニ、言ウシテ、白サク。

さて、かむい、すなわち、仁釀母をば背にしたる励尊主、すなわち、「かんぜおん」にして、菩薩とてはあられます、大要訣も、なおし、ほとけを通し、もはや、いわゆるところへと、ご弁証あそばされておわした。

世尊。何ガ故ニ、復タ、此ノ、般若波羅蜜多陀羅尼ヲ、説キタマウヤト。

何ごととしてはおろうはずの、因由によってか、ひるめよ、このような、高度に微密たらんに不偏なるべきとある、砌が、なおも、はんにやはらみた、すなわち、「ゆかしことのほかのはかどりということ」のことではある。と云えるのでもありましようや。

世尊、告ゲテ、言タマワク。

すなわち、ほとけこそが、ご表白なりたもうていませる。

我、一切ノ、少善ニシテ、方便懈怠ノ、衆生ヲ、愍念センガ為ニ、是クノ故ニ、此ノ、般若波羅蜜多陀羅尼ヲ、説クナリ。彼ヲシテ、受持シ、讀誦シ、若シハ、自ラ、書寫シ、若シハ、他ニ教エテ、書カシメナバ、此等、一切ノ、衆生ハ、速疾ニ、無上ノ、菩提ヲ、證得スベシ。

けだし、これ、「小許」が、方便、すなわち、「便意」なりけることからではありません。

いずれ、およそ、諸英霊らとしておろう者たちが、いかにも、つかまつらんわけではあっても、なおし、薄弱たらん諸情味たちのことにはあろうはずでもなければありませぬが、いかに、彼ら自身がではあっても、しかも、なお、このような、はんにやはらみつ、すなわち、「ゆかしことのついでのはからいということ」としておる、場すなわち、高次に微瑣たるべきとおろう者らが、これ、格度なりとてあらん、廷をして、やはり、自疏せしめることであろうし、やがて、弁済せしめこれあるかもしれませぬ。いやさ、むしろ、記銘これありもうすことであろうし、いよいよ、銘記せしめこれあるやはしれませぬ。

そのような、つとに、諸々の、なにもかもどものこととてあつた、者たちとして・すなわち、「少許」なる、方便、すなわち、「祐能」一代によって・ここに、ようやく、菩提、すなわち、覚然体という、並行涯そのものも、また、存立なることであらましよう。

しばらく、このような、作用のことである、ものごとによって、なおも、あずかるべくおらんばかりではありましようが、御宗子、ひみこよ、いよいよ、このような、委積なっているばかりにとおる、砌のことにはあるべきはずでもあるのが、すなわち、高度に微密なるべしとあろうことがらどもが不易たるべけんとはおるであろう、ほんにやはらみつ、すなわち、「ゆかしことのほかのはかどりということ」でなければなりませんまいぞ。

是クノ如ク、是クノ如クニ、世尊ハ、善ク、是クノ、般若波羅蜜多ヲ、陀羅尼トテ、説キタマエリ。是クノ時に、聖、觀自在菩薩、摩訶薩ハ、復タ、佛ニ、言ウシテ、白サク。

このようにこそ、ようやく、弁証なっている者一代に於て、いまし、仁愛を背にしたる励尊主、すなわち、「かんぜおん」も、いよいよ、菩薩、すなわち、大英概として、なおも、みほとけをこそ通して、もはや、かくいうところにと、ご弁済、これ、あそばしたことであった。

世尊。此ノ、法ハ、實ニ、未曾有タリ。世尊。此ノ、法ハ、實ニ、未曾有ナリ。善逝。世尊。大慈ハ、一切ノ、少善ニシテ、方便懈怠ノ、衆生ヲ、救度シ、利益・安樂・ヲ、得セシメンガ為ニ、斯クノ、妙法ヲ、説キタマイシカト。

けだし、希有なるべきとはあろうおおみものごとも、また、それ、ひるみよ、なお、至極たるべきとおろうことがらどもが、つとに、奇特性なるべくしてあったばかりとはあろうはずでもありましよう。

たかぎよ、もはや、それなりにではあるにもほかなりませぬが、ひるめよ、やがて、「誰もかれも」という諸英魂らの負託せられてはあらせる御方の為にも、なお、このような、法理をば元理としてあそばす、御方が、いずれ、叙事されてはおわしますばかりでもなければありますまい。けだし、浮薄なるべしとあろう、諸吾我たちの、事に、やがて、あずかるべし、とこそおらんにはほかならぬばかりの、平準一代、すなわち、もはや、託付されてあるばかりとてはあらんところの、やすらぎそのことの為、に、いずれ、あずかるべしともあらせりょうばかりではありましようけれども。

是クノ時、世尊、此ノ、經ヲ、説キタマイテ、已ナリキ。諸々ノ、聲聞、并ニ、諸々ノ、菩薩摩訶薩。一切ノ、世間。天・人・阿蘇羅・彥達縛・等八、佛ノ、説キタマウ所ヲ、聞イテ、皆ナ、大歡喜シ、信受シ、奉行シ、禮ヲ作シテ、而カモ、退リヌ。

ということであったが、このようなものごとそのことを通して、いよ、ご弁証あそばされておわたしたもの、すなわち、ほとけにはあらせたもうた。

はたして、知的なるべしともいまいしょうが、しかも、それ、仁篤たるべきとおろう者らを背にしたる勵導主、すなわち、「かんぜおん」のこととはおわします、菩薩様、すなわち、大要訣ご一代がこそ。それはともかく、諸々の、ピクシュ、すなわち、節介能、すなわち、はふりたちが。なおし、そのような、諸々の、菩薩たりし、御仁がたとしてもではあるけれども、それはともかく、なにもかもが、これ、近畿圏なるべきとはあらねばならなかったばかりでもあるところの、眷属層そのもの、すなわち、半ば、それ、あまつかみ、すなわち、靈性たる、諸人智という、非神格が幽調なるべくもあらんばかりのではあるけれども、まさしく、「世間」がこそ。なおし、これ、みほとけの方からかたじけのういたさんまに、いまし、自叙なりたもうてあそばせる御方ご一代を通し奉り、こもごも、おんまつらいもうしあげましたことであった。

### 佛説聖佛母小字般若波羅蜜多經

以上、南都小塔院住職河村俊英訳、漢訳本参照、梵本参考翻訳、小字般若經一卷、終。